

第 28 回新潟小児循環器懇話会

日 時：2009 年 9 月 26 日（土）

場 所：新潟大学医学部 有壬記念会館

当番世話人：塚野真也（新潟県立新発田病院小児科）

1. 当科における川崎病不全型の臨床

新潟県立新発田病院小児科

松尾真意，塚野真也，中牟礼道秀，牧野 仁，大石智洋，松永雅道，田口哲夫

当院において 2005 年 10 月から 2009 年 9 月までの間に経験した川崎病不全型の症例を検討した。川崎病として入院加療した症例 73 例のうち，川崎病不全型は 11 例で，急性期冠動脈拡張を 2 例に認めた。男児に多く，症状では，発疹が少なく頸部リンパ節腫大が多い傾向にあった。急性期冠動脈拡張を認めた 2 例は，原田スコアが 4 項目以上で，低 Na 血症，Ht 低値であった。発熱が持続しなくても冠動脈拡大がみられている症例があり，症状，血液検査所見，心エコー検査等から治療を決めていく必要がある。

2. 川崎病における血管障害の新たなバイオマーカー可溶性 LR11

新潟大学大学院医歯学総合研究科小児科学分野

渡辺健一，鈴木 博，沼野藤人，長谷川聡，内山 聖

済生会新潟第二病院小児科

廣川 徹，城山照貴

川崎病遠隔期は冠動脈後遺症，全身動脈硬化が問題となり，両者の進展に内膜平滑筋が関与する。近年内膜平滑筋の点から血管障害を評するバイオマーカーとして LR11 が期待されている。川崎病遠隔期 11 人，急性期 1 人の血中可溶性 LR11 と血管障害の関連を検討した。遠隔期 CAL+群で正常範囲以上が 4/7 例と高頻度であった。急性期症例(CAL+)は 4 病日から急性期を過ぎても高値が持続した。今後も症例を蓄積し，LR11 の川崎病血管障害のバイオマーカーとしての有用性が期待される。

特別講演 先天性心疾患のカテーテル治療 —最近の進歩—

国立循環器病センター 小児循環器診療部

矢崎 諭

先天性心疾患に対するカテーテル治療の歴史は，1966-7 年の Rashkind 法，Porstmann 法に始まり，バルーン拡大，ステント留置，経皮的半月弁留置術と発展を遂げてきた。日本においては 1984 年のバルーン肺動脈弁形成術から 1990 年代には動脈管コイル閉鎖，ステント留置と続き，近年では Amplatzer ファミリーによる心房中隔欠損および動脈管開存閉鎖術が行われている。カテーテル治療の進歩は常にデバイスの進化とともにあり，それは治療適応の拡大・安全性および有効性の向上に寄与し，年間 3000 件を超える（JPIC 学会集計）治療の普及にも貢献している。